

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の2年目)

1. 研究課題

中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む

Chinese Laity's View of Buddhism: Reading the Expanded Collection of the
Propagation of Light compiled by Daoxuan in the Tang

2. 研究代表者氏名

船山徹

FUNAYAMA Toru

3. 研究期間

2020年4月-2024年3月(2年目)

4. 研究目的

本研究班は、共同研究班「中国在家の教理と經典」の方法と成果に基づき、唐の道宣撰『広弘明集』に収める中国在家の著作から彼らの仏教観を検討する。四～七世紀頃の中国で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく文人等の在家信者が果たした役割も大きかった。出家者が学んだ經典や論書は現在の大蔵經の全貌を理解することから知られるが、一方、在家者の仏教知識がどの程度のものだったか、それは出家社の理解と相違する点があったのか、在家者に共通の得手不得手があったか等の問いに答えることは予想以上に難しく、現在に至るまで確かな答えは得られていない。人文研ではかつて六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、『肇論』『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣撰『広弘明集』(7世紀)を主な素材として中国在家仏教の実態解明を目指す。

Based on the methodology and results conducted by "Buddhist Sutras and Doctrines for the Chinese Laity" (2016-20), this projects attempt to shed a new light on the acutal situation of Buddhist Laity in medieval China. As Chinese Buddhism underwent various developments between the fourth and seventh centuries, not only monastics but also laypeople played a large role. Although we can learn about the sutras and treatises studied by monastics through the entire Buddhist canon that is extant today, with regard to lay Buddhists, various questions remain unexpectedly difficult to answer, such as: To what extent did laypeople possess knowledge of Buddhism? On what points was that knowledge similar to and different from the knowledge held by monastics? Were there any shared likes and dislikes of particular Buddhist scriptures and ideas

among laypeople? Previous seminars held in this institute studied texts such as the Zhao lun and Hongming ji in order to understand the Buddhism of intellectuals and ordinary people during the Six Dynasties, Sui, and Tang periods. The present research seminar aims to continue this line of inquiry, taking as its main source text the Expanded Collection of the Propagation of Light (Guang hongming ji, 7th c.) - in which the compiler Daoxuan gathered the writings of many lay Buddhists - in order to clarify the real conditions of lay Buddhism in China.

5. 本年度の研究実施状況

今年度は『廣弘明集』巻二十六に収める梁の武帝「断酒肉文」を会読し、昨年から継続して2021年12月に全文を読み切り、訳注を作成した。続いて同月に班長が全体を振り返り、「梁武帝「断酒肉文」の特徴」と題する総括をした。その後、在家信徒の仏教観を示す原典資料として『廣弘明集』巻十九に収める一連の著作の会読を始めた。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-16 中国在家の仏教観 梁武帝「断酒肉文」会読 発表者 中西竜也
2021-05-07 同 同 発表者 魏 藝 龍谷大学大学院学生
2021-05-21 同 同 発表者 趙ウニル 京都国立博物館
2021-06-04 同 同 発表者 倉本尚徳
2021-06-18 同 同 発表者 船山徹
2021-07-02 同 同 発表者 船山徹
2021-09-17 同 同 発表者 稲本泰生
2021-10-01 同 同 発表者 中村慎之介 文学研究科学生
2021-10-15 同 同 発表者 船山徹
2021-10-29 同 同 発表者 趙ウニル 京都国立博物館
2021-11-19 同 同 発表者 魏 藝 龍谷大学大学院学生
2021-12-03 同 同 発表者 趙ウニル 京都国立博物館
2021-12-17 同 梁武帝「断酒肉文」の特徴 発表者 船山徹
2022-02-18 同 陸雲「御講波若經序」 発表者 船山徹
2022-03-04 同 同 発表者 魏 藝 龍谷大学大学院学生

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

所内

学内

学外

河上麻由子(大阪大学文学研究科)、魏藝(龍谷大学)、趙ウニル(京都国立博物館)、中西俊英(京都女子大学)、久永昂央(東大寺ミュージアム)、村田みお(近畿大学国際大学)

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	9	0	0	0	1	117	0	0	0	13
国立大学	1	1	0	1	0	0	15	0	15	0	0
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	3	3	0	0	0	1	32	0	0	0	15
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	0	1	0	0	15	0	15	0	0
民間機関	1	1	0	1	0	0	15	0	15	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他 ※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	8	15 (0)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	2 (0)	194 (0)	0 (0)	45 (0)	0 (0)	28 (0)

※「その他」の区分受入がある場合
 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員
 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)		
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東方學報京都	1	R3. 12	未詳撰者『慈悲道場懺法』十巻の資料価値	船山徹

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度最後に始めた『廣弘明集』巻十九の会読を始める。一回ごとに担当者を定めて原文校勘・訳・注を作成する。一年16回、対面式研究班を開催する予定である。具体的に会読する文献は次の通り。陸雲「御講波若經序」(2回)、蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」(5回)、「發般若經題」(6回)、蕭綱「大法頌」(2回)。これらは『廣弘明集』巻十九および巻二十に含まれ、その全文を順に会読する。また、研究会終了後、各担当者は討論結果を踏まえた修訂ファイルを班員全員に配付する。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

今後も『廣弘明集』巻二十に収める著作を会読し、まとまり毎あるいは著作毎に、原文校勘・訳・注を整理し、『東方學報』京都に研究成果を公刊する。まず 2022 年度最初には、会読を終了した梁武帝「断酒肉文」の全文訳注を『東方學報』京都 97 冊に掲載すべく、目下準備中である。